View Special 特集

# 仕掛ける学習担導

## 生徒が学ぶ環境をどう整えるか

**個性を誤解した利己的傾向の増大、入試競争の緩和などにより、生徒を学習に取り組ませる要因は確実に希薄になった。そんな中、生徒がやる気になる内発的な意欲を引き出すしかけが、教師に求められている。**

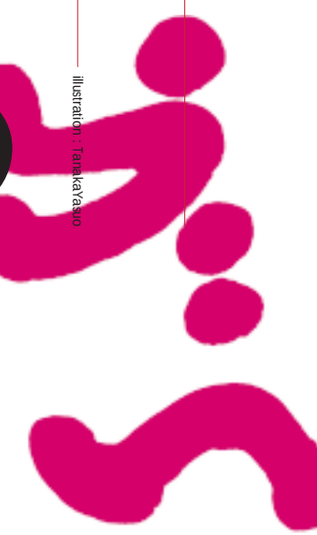


Illustration : Tanakayasuo

生徒のやる気はどのようなしかけ、環境下で生まれてくるのか。生徒自らが進路を考え、人生の目標を見つけることはなにより大切だろう。しかし、それ以外にも、生徒が意欲的に学習に取り組める環境が整えられているかどうかも見逃せない。

前提として「自分は先生から好意的、肯定的に見られているという安心感」「自分はできるんだという自己肯定感」を生徒が感じられる雰囲気が欠かせないといわれる。そのうえで教師が生徒1人ひとりに合わせて「なにを、どれだけ、いつまでに、どうすればいいか」という目標（あくまでも達成可能な目標）を与えていく。生徒はその目標をクリアすることで達成感を感じ、さらに意欲的に新たな目標に挑む。目標→達成→新たな目標→達成の繰り返しで上昇気運に乗せることができれば、生徒はますます前向きに学習に取り組むことになると考えられる。

### 学習意欲を喚起する環境作りの五つのポイント

今、多くの高校で学習環境をよりよいものにするための取り組みが行われている。先生方によると生徒のやる気を喚起する環境作りには、次のポイントが挙げられるようだ。

**①ポジティブな集団作り**　活気ある、前向きな集団（クラス）作りは、担任の重要な仕事である。例えば、昼休みに勉強している生徒がいたとき、周りの生徒が「かっこつけて勉強なんかするな」「そこまでやってなんになるんだ」と冷やかすような雰囲気がクラスにあったとしたら、その集団はマイナスの価値観を共有していることになる。「努力して勉強するのはいいことだ」ということをまず生徒が受け入れ、プラスの価値観を共有する集団を作っていきたい。

**②生徒と教師の日々の交流**　ポジティブな集団は担任が放っておいて自然にできるものではない。教師が日常的に生徒と接触し、相互に信頼を築く中から生まれてくる。HR、面談といったフォーマルな場面だけではなく、例えば、授業が終わったあと、昼休み、掃除の時間といった日常的な機会を利用して、頻繁に生徒との交流を図っていきたい。

**③一斉指導と個別指導の効果的な使い分け**　生徒の気質、志向が多様化した結果、個別指導の役割が大きくなっているといわれる。しかし、一斉指導の必要性がなくなったわけではなく「一斉指導あっての個別指導」という原則は現在も変わらない。まず一斉指導で基本型を教え、それを個々の生徒に合った形にブレークダウンするのが個別指導だ。一斉指導が特に効果を発揮するのは、基本型を教えるという性格上、スタート時期にある。各学年の初めに学年の勉強の指針、各教科の勉強法を教えたり、夏休み前、冬休み前に休み中の勉強のしかたを教えるといった場面が考えられる。その後、生徒間に開きが出てきた段階で、生徒1人ひとりに合わせた個別指導が求められてくる。

**④授業での動機づけ**　日々の学習の具体的動機づけは、やはり授業の中にしかない。それには当然ではあるが、学ぶ楽しさを感じさせる授業がまず求められる。また、予習・復習が必要な授業を行うことも大切である。最近の生徒は予習をしないとよくいわれるが、予習をしなくても成り立つ授業だから、という場合がある。生徒が予習をしないという事実の裏には、予習の必要な授業をしているのか、という問いが隠されている。

**⑤テストの活用**　本来、テスト（特に定期テスト）は生徒を育てるためのものである。授業の理解度を問うとともに、学んだ内容を定着させ、次の意欲の動機づけとしての役割を持つ。その役割が忘れられ、むしろ生徒を失望させ、やる気をそぐような難しい内容が定期テストに出されてはいないだろうか。

### 教師が連携し生徒を複数の目で見守る

そして、これらの観点を踏まえた個々のしかけを、より効果的なものとして機能させるため、多くの高校で心がけていることがある。それは担任と教科担当、担任と部活動の顧問といった教師同士の連携の強化だ。

例えば、担任から「あの生徒は数学で悩んでいるらしい」といったひと言が教科担当にあれば、教科担当はその生徒に関心を持ち、より適切な教科指導が可能になる。逆に教科担当からの情報が、担任の指導を適切にさせることもあるだろう。担任と部活動の顧問とのやりとりも同様だ。1人がクラスの40人全員を見るのは難しいことだが、連携すれば複数の目で1人の生徒を見ることができるはず……この発想を教師間で共有し、個々の取り組みの効果をさらに高めていく。

学習の成果はすぐ点数となって現れるとは限らない。しかし、点数には出なくても、例えば答案の書き方がよくなった、授業で積極的に質問するようになったなどの変化が出ることがある。そういうプロセスはクラス担任よりも教科担当の方が見えやすい。ここに複数の目で生徒を見るメリットがあるのだ。

結果を重視する社会風潮があるが、学校はプロセスを重視する場である。生徒の成長のプロセスを、教師同士の連携で見守ってやりたい。そして、そういう教師の目に対して、生徒は「先生は自分を温かく好意的に見ている」と感じるはずだ。それが意欲的に学習に取り組む環境を作ることになるのだろう。

各高校の試み

山形県立 山形北高校

# 模擬授業とその予習を合宿で体験させ、学習スタイルを確立

山形北高校では例年、ゴールデンウィーク前に1年生を対象とした合宿を実施している。この合宿は、かつては生活指導を目的としたものだったが、7年ほど前から学習合宿に切り換えられた。この背景を、同校に勤務して17年目になる英語科担当の佐藤由紀子先生は次のように語る。

「家庭学習がきちんとできていない生徒がめだつようになってきたんです。以前は、授業を先取りしてどんどん予習を進める生徒が多かったのですが、今はいわれた範囲しかやってこない。予定よりもちょっと早く授業が進むと、途端に答えられなくなるんですね。また、予習のやり方自体も表面的。例えば英語にしても、単語だけは丹念に調べてくるけれども、全体の文意をつかむような勉強をしていない。掘り下げ不足を感じます」

予習が満足にできていないと、授業での理解不足につながる。そして授業を未消化のまま受けていては、復習もなにをポイントに学習したらいいのかわからなくなってしまう。

「そこで1年生の早い段階で、予習のやり方を生徒に修得させるために、なんらかの機会を設ける必要があるということになったのです」

山形県立山形北高校
佐藤由紀子
英語科担当。今年度は1年生の学年主任。山形東高校通信制などを経て、昭和57年度より山形北高校に勤務。

## 学習合宿でしかける

平成10年度の山形北高校の学習合宿は、4月30日からの3日間、蔵王温泉の宿舎にて行われた。対象となる教科は国語、数学、英語の3教科である。

1日目、生徒たちは正午前に宿舎に到着。開講式後、校長講話を聞く。1年1学期の生活や学習の重要性、これからの生きる道についての話に「なぜ蔵王まで来て学習合宿なのか?」の疑問も解ける。昼間はクラスごとに生徒間の団結を深めるための行事が中心で、授業は行われない。だが、その夜には翌日の授業の予習のための自習時間がさっそく設けられる。実はこの自習時間が、同校ならではの工夫に満ちたものとなっている。

「まず生徒には、合宿では教科書とノートと辞書を持ってきなさいとだけ指示しておいて、期間中にどんな授業をするかについては一切伏せておきます。そして1日目の自習時間の初めに、明日の授業内容を初めて生徒に公表するんです。そうすることによって生徒を、合宿期間中の限定された自習時間の中でしか、翌日の授業の予習ができない状況にしておくんです」

自習は、クラスごとに割り振られた部屋で、ほかの生徒と肩を並べながら取り組む。しかし自習をやっている間、生徒はクラスメートにも教師にも一切質問ができないルールになっている。まるで家庭で各自が勉強しているのと同じように、生徒は自分自身のやり方で、予習に取り組まなくてはならない。

「教師は生徒の自習の様子をチェックして回りますが、声をかけたりといったことはしません。教師としては『もっとこんなふうにノートを取った方がいい』とか、生徒についてアドバイスしたくなるものなんですが、あえて我慢しているんです」

これによって、教師は生徒1人ひとりの家庭学習の中味をつぶさにつかみ取ることができる。まず自習時間を限定することで、生徒がある一定範囲の部分をこなすのにどれくらいの時間がかかるかがわかる。そして家庭での学習のやり方を合宿の場で再現させることで、生徒の予習の質も把握することができる。

「私は英語科の担当なので、英語の予習をしているクラスの様子を見て回るのですが、生徒の勉強のやり方は本当にさまざまです。出てくる単語をかたっぱしから辞書で調べている生徒もいれば、英文を丁寧にノートに書き写している生徒もいる。へえ、この子たちは普段自宅ではこんな勉強をしているのか、と発見することがいろいろと多いですね」

## 予習法が変わった

山形北高校では、入学時のガイダンスで各科目の予習のやり方については一定の説明を行っている。例えば英語に関していうと、まずは一つのセクションの文章を最後まで読みとおして全体の内容をなんとなく把握し、次にパラグラフごとに読んで大意を把握。わからない箇所は文脈の前後から意味を推測し、それでもつかめないときに辞書を使う、といった指導をしている。

ところが合宿で生徒の自習の様子を見ると、教師の指示どおりに予習している生徒は半分にも満たないという。

「1度話したぐらいでは、生徒は理解してくれないんだなと、つくづく思いますね。そこで生徒たちに効果的な予習を行うことが重要であることを肌で感じてもらうために、2日目からの授業が意味を持ってくるんです」

単語を一つ一つ辞書で引いているような生徒。2日目の授業ではそんな生徒に対して、あえて英文の大意を問うような質問をする。答えられない生徒がいると「昨夜の自習時間のときにこんな勉強をしている人がいたけれど……」といった形で予習法について切り出す。それにより生徒の側は「効果的な予習をしないと、授業で少しも役立たないんだな」ということが直接的にわかるというわけだ。

「合宿2日目の自習時間での生徒の予習に対する取り組み方は、1日目とはまるで違ったものになっています。時間をかけず、しかもポイントを押さえた学習ができるようになります。最後に合宿の感想を書かせると、やっと予習のやり方がわかった、これからは楽しくできそうだ、という生徒が多いですね」

## 学習時間も延びる

学習合宿を通じて、予習のポイントを心得た生徒たち。次に課題になってくるのは、家庭学習の時間量を少しでも増やすことである。

「予習のコツをつかんだ生徒は、自然と学習時間も延びていくものなんですよ。予習が授業に役立っていることを感じるから、ますます予習に積極的に取り組むことになる。しかし中には、学習合宿を体験したあとも、自分の学習スタイルを変えられない生徒がいます。その子どもたちをどうするかが、大きな課題なんです」

教師のもとに、勉強のしかたがわからないと質問に来る生徒ならまだいい。しかし、中には悩みを抱えたままでなにもいわない生徒もいる。そこで威力を発揮するのが「学習の記録」である。山形北高校では1日の総家庭学習時間や各科目ごとの学習時間、1日の反省などを生徒が「学習の記録」に書き込み、それを担任がチェックしている。

『学習の記録』で悩みごとを書いていたり、急に記録を提出しなくなった生徒については、できる限り教師が声をかけるようにしています。生徒1人ひとりと丁寧に接し、適切なアドバイスや励ましをするように心がけています」

同校では今年の夏休みに、初めての試みとして1年生を対象とした「学習会・質問会」も計画しているという。これは夏休み期間中に登校日を設けて、生徒が各科目の教師のところに理解できない部分を質問に行くというもの。

不得意科目・分野を1年生の段階でなくしておこうというのがねらいだ。そんなふうに山形北高校では、生徒が学習につまずきそうになる1歩前を見越しながら、教師がさまざまなしかけを常に考えているようだ。

**学習合宿の日程(10年度)**

| | | |
|---|---|---|
| 4月30日 | 9:00 | バス乗車・出発 |
| | 11:00 | 開講式　校長講話 |
| | 12:30 | 昼食　休憩 |
| | 13:30〜14:30 | 学習のポイントの説明(各教科15分) |
| | 15:00〜17:00 | クラス別活動 |
| | 17:30〜18:00 | 校歌の練習 |
| | 18:40〜23:00 | 自習 |
| 5月1日 | 8:50〜 9:55 | 授業Ⅰ |
| | 10:05〜11:10 | 授業Ⅱ |
| | 11:20〜12:25 | 授業Ⅲ |
| | 12:45〜13:30 | 昼食 |
| | 14:00〜16:00 | 野外活動 |
| | 16:30〜17:00 | 校歌の練習 |
| | 18:40〜23:10 | 自習 |
| 5月2日 | 6:00 | 起床 |
| | 8:50〜 9:55 | 授業Ⅰ |
| | 10:05〜11:10 | 授業Ⅱ |
| | 11:20〜12:25 | 授業Ⅲ |
| | 12:45〜13:30 | 昼食 |
| | 13:40〜14:30 | 閉講式(感想文作成など) |
| | 15:40 | バス乗車・出発 |

View Special 特集 仕掛ける学習指導

各高校の試み

兵庫県立
宝塚北高校

# 「家庭学習の記録」で生徒の学習状況を分析し、教師間で共有する

朝のSHRの時間、宝塚北高校の生徒たちには、必ずこなさなくてはいけない一つの日課が待っている。「家庭学習の記録」という用紙に、昨日1日の起床・就寝時間、家庭学習を行った時間帯、各教科の勉強時間を書き込むことが課されているのだ。週の初めには、前週の反省と感想についても述べることとなっている。用紙はSHRの終わりに回収され、担任が毎日チェック。終礼時に再び生徒に返される。

『「家庭学習の記録」を始めたのは、今から10年ぐらい前のこと。記録は、1年生の4月下旬から始まり、だいたい3年生の1学期ぐらいまで続けられます』と語るのは、同校進路指導部の武内公宏先生。

宝塚北高校は、昭和60年度に開校した比較的新しい学校である。宝塚市周辺の高校入試は総合選抜制度を採っており、同校に入学してくる生徒の学力はさまざま。卒業後の進路も、京都大や大阪大進学者から、専修学校進学者や就職する者までおり、かなり多様化しているが、同校の進学実績は順調に伸びている。

だが、そんな同校も開校当時は、総合選抜制を敷いているほかのグループ校と比較して、どちらかというと成績下位層の生徒が集まる傾向にあったという。中学時代に家庭学習習慣が身についていない生徒が多く、"生徒にいかに勉強させるか"が悩みの種の一つだった。

兵庫県立宝塚北高校
**武内公宏**
進路指導部長。英語科担当。尼崎稲園高校を経て、昭和61年度、開校2年目の宝塚北高校に赴任。

兵庫県立宝塚北高校
**長沢嘉昭**
2年生の進路指導係を担当。数学科担当。理数コースの2年生のクラスの担任も受け持っている。

「生徒が勉強へと向かっていく体制を作るには、1人の教師の努力だけでなく、教師みんなで協力しながら取り組むことが大切。そこで考えられたのが『家庭学習の記録』だったんです。雑務に追われてどんなに忙しくても、これだけはきちんとやっていこうという意識がどの教師にもありました」(武内先生)

## 教師の連携で効果増

「家庭学習の記録」を毎日続けることには、いくつかのメリットが考えられる。まず生徒自身が自分の学習時間を反省する機会が持てること。各教科ごとの学習時間も算出しなくてはいけないので「英語にばかり時間を割きすぎていて、数学の勉強が足りない」というふうに自己分析ができる。また、いくら学習時間が増えたとしても、深夜遅くまで机に向かっているようでは生活のリズムはいつか必ず乱れる。記録は、規則正しい生活を送るためのバロメーターにもなる。もちろん生徒が提出した記録は担任の教師が毎日目を通すので、学習状況や生活リズムが改善されない生徒に対して、教師の側からひと言注意するということもやりやすくなる。

「特に私たちが気をつけて読んでいるのは、生徒が書き込んでくる〈1週間の反省・感想〉ですね。例えば生徒が『この前の生物の授業で勉強した○○という部分がなかなか理解できなくて悩んでいる』と書いてきたとします。そんなとき担任は、その生徒に生物の教師のところに相談に行ってみるように勧め、一方で、生物科の教師にも、生徒が○○という部分の相談に来るはずだということを伝えておきます。そんなふうに、生徒が学習をしていく中でつまずきそうになったときに、教師が連携していち早くフォローをするうえでも『家庭学習の記録』は重要なんです」(武内先生)

ちなみに学習時間の書き込みは、生徒自身による自己申告となっている。学習時間が多い生徒も少ない生徒も、不思議なくらい正直に報告してくるという。「その点はうちの生徒の質に助けられている」と武内先生は語るが、教師がきちんとチェックすればウソの申告をしてもすぐにばれてしまうことは、生徒自身にもわかっているはず。教師が真摯な態度で生徒の記録に接していることが、「家庭学習の記録」が長続きしているコツといえるだろう。

## 学習時間8時間の合宿

ところで同校が生徒に学習習慣を身につけさせるために、「家庭学習の記録」と並んで重視しているのが、1年生の4月下旬に2泊3日で行う生活集団合宿である。

「この合宿の目的は、とにかく生徒に勉強させるというものです。期間中生徒は1日8〜9時間集中して机に向かうことになります。つまり中学生時代までには味わったことのない経験をさせるわけです。かつては昼間に登山をさせ、夜を勉強時間に当てるといったことも行いました。高校生は部活でヘトヘトになっても、帰宅後に勉強しなくてはいけませんからね。それと同じ状況を作ろうとしたんです」(武内先生)

生徒にとってはかなり厳しい合宿になるわけだが、武内先生はこの合宿によって、生徒に達成感を味わってもらうことを一つの目的としているという。

「生徒は合宿を通して、今までの限界をちょっとだけ越えることになるわけです。自分もがんばればできるんだという気持ちを持つことができる。その自信が、学習へと向かう意欲に結びついていくことを期待しているんです」(武内先生)

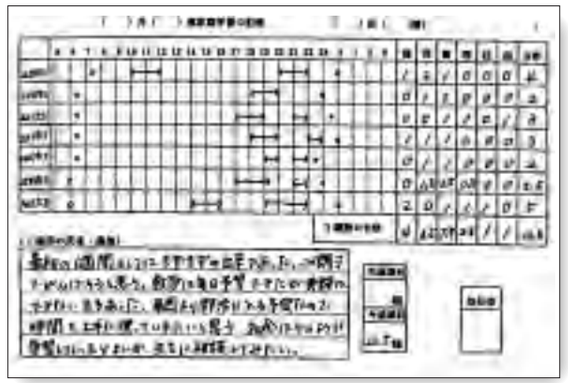
## 達成感を持たせる指導

生徒に達成感を持たせることによって、意欲をかき立てようというやり方は、普段の授業の中でも一貫している。授業は、生徒が予習と復習をしていることを前提として、少し速い進度で展開される。授業中に小テストを課す教師が多いことも同校の特徴で、多いときには1日に3〜4科目の小テストを受けなくてはならない場合もあるという。つまり、嫌でも生徒が家庭学習をしなくてはいけないような状況を、教師の側で意識的に作り出しているのだ。

「そんなふうにびしびしやると、当然ついていけなくなりそうな生徒が出てきますよね。そこはクラス担任や学年主任、教科担当がいっしょになってその生徒を励ますわけです。もうちょっとがんばってみろ。そうしたら必ず結果は出る。わからないところは先生に聞けばいいから、というふうに。がんばることさえできれば、どんな生徒でも伸びていきます。苦しかったけれども、それを乗り越えてできたという達成感を、生徒に持たせてあげたいんです」(武内先生)

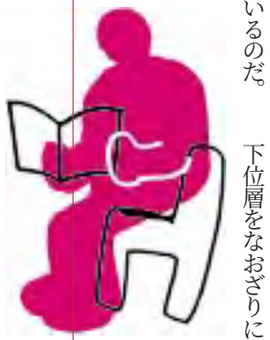
また、宝塚北高校では英語、数学、理科に関しては習熟度別クラスを設けている。生徒の学力によってクラスを分けることは、一つ間違えれば下位層の生徒のやる気を萎えさせることにもなりかねないが、同校ではその点でも十分に留意しているという。数学を担当している長沢嘉昭先生は語る。

「上位層の指導にだけ力点を置いて、下位層をなおざりにすることは絶対に避けるという意識で臨んでいます。下位層の生徒は、その生徒なりに勉強した過程と結果を評価します。ほかの生徒と比べるのではなく、その生徒がどれだけがんばったかが大切です。だからうちの生徒は皆、私は先生から見捨てられてなんかいないという気持ちを持てていると思いますよ」



個々の生徒の状況を的確に把握し、常に生徒を励ますことによって、日々の学習への意欲を持続させる。それが宝塚北高校の学習指導のスタイルといえそうだ。

View Special
特集
仕掛ける学習指導



各高校の試み

愛知県
# 名古屋学院高校

# 確認テストやオリジナル教材を活用し生徒と密に接する指導を展開

「生徒はちゃんと教師の取り組みを見ているんです。熱心な教師が多い学年は、生徒も真剣に補習講義に出席します。でもおざなりの授業では、生徒は学校を離れて塾や予備校の方に流れてしまう。だから大切なのは、教師が生徒と時間をかけてきちんとつき合っていくことだと思うんですね」

こう語るのは、名古屋学院高校副校長の坂井繁之先生。坂井先生によると、おもしろいことに低学年から塾への依存度が高かった学年は進学率が低く、逆に依存度が低かった学年は進学率が高い現象が見られるという。学校が求心力を保ち、教師が生徒の状況を把握しながら的確な指導を行うことが、生徒の学習意欲を維持するうえでも、進路目標を実現するうえでも一番重要ということなのだろう。

もちろん生徒が塾や予備校へ通うのは、学習意欲があるということだから一概には否定できない。だが生徒の塾への依存度を、学校の求心力があるかないかの一つのバロメーターとして見ることは可能だ。進路部長の百田整司先生は次のように語る。

「その点、本校では近年、低学年から塾通いをしている生徒の割合は減る傾向にあります。生徒の学校への信頼度が増しているということかもしれません。また本校の教師陣は、生徒への指導に熱心な”学校大好き教師”が多いように思います。生徒にも、教師陣の熱意が伝わっているはずです」

愛知県名古屋学院高校
**坂井繁之**
今年度より副校長に就任。昭和15年岐阜県生まれ。同校に勤務して35年になるベテラン教師。

愛知県名古屋学院高校
**百田整司**
進路部長。英語科担当。昭和17年佐賀県生まれ。48年度より非常勤講師、50年度より専任教師として同校に勤務。

## 確認テストを繰り返す

名古屋学院高校は、昨年度に創立110周年を迎えた名古屋を代表する私学の一つ。一時期、進学率などで低迷したこともあったが、'80年代半ばに人文語学コース、理数コース（現在は文理コース）という特別クラスを設置したことをきっかけに、再び進学実績を伸ばしてきた。特別クラスに刺激を受けて、普通コースの生徒の学力もアップ。ここ数年、国公立大合格者は毎年70～90名程度に達しており、4年制大学進学率も70％を超えている。

特別クラスを開設した当時から、同校ではきめ細かい学習指導に取り組んできた。その一つに、日ごろの授業の理解度を測るための確認テストがある。

「確認テストを実施するのは国語、数学、英語の3教科。各教科とも週1回、1時限目が始まる前の30分間を使って行われます。本校の場合、授業は生徒の現実よりもやや高い目標を設定しています。ですから本当に生徒たちが授業のポイントを理解しているのか、文字どおり確認する必要があるんです」（百田先生）

この確認テストで生徒に課されるハードルはなかなかシビアだ。テストが終わると、教師はその日のうちに採点。正解率が8割を超えれば合格だが、そうでない者は放課後に追試を受けることになる。それでも合格できない者は、さらに翌日に再追試。生徒が授業の内容をほぼ完璧（べき）に理解するようになるまで、繰り返し指導するわけだ。確認テストは、従来は文理コースの生徒のみに実施していたが、昨年度の1年生から普通クラスの生徒に対しても課されることになった。

「確認テストを始めた当時は、点数が取れなかった生徒を会議室に残して、夜遅くまで指導したこともありました。段ボールごとカップうどんを買い込んで、生徒たちに夜食として食べさせていた教師もいたほどです」（百田先生）

## 活発な教師の取り組み

名古屋学院高校では確認テスト以外にも、1年生の夏休みに6泊7日で学習合宿をしたり、大学合格を果たした先輩の受験校と各模試での成績を掲載した「大学進学資料」を生徒向けに発行するなどして、生徒の学習意欲向上に努めている。また先輩の「合格体験記」は1年生～3年生までの全生徒に配っている。だが、それらの学校全体での取り組みと同様に活発なのが、各教科の教師による教材開発である。

「授業の理解度を高めるには、家庭での予習がポイントになってきます。そこである英語教師は、効果的な予習ができるように予習プリントを作成し、生徒に取り組ませています。そのプリントをこなして授業に臨めば、スムーズに理解できるというわけです。また本校では家庭学習用の教材として、生徒に市販の参考書や問題集を持たせていますが、ある国語教師は『まだうちの生徒は、市販の参考書や問題集を使いこなせるレベルではない』といって、その参考書や問題集を使って学習するうえでの参考になるようなオリジナルプリントを作って生徒たちに配っています。手作りの教材開発や授業研究を行っている教師が多いですね」（百田先生）

百田先生は英語科の担当だが、やはり数年前に3年生のクラスを持ったときにオリジナルのテストを考案した。模試などで生徒がミスを冒しやすい基本例文をチェックして問題を作成。秋から「デイリーチェック」と称して、毎朝生徒にテストを課した。

「最近、こういった教師個々の試みを自分だけのものにとどめず、学校全体で共有化していく雰囲気が広がっています。例えばオリジナルプリントを作ったら、同一教科のほかの教師にも使ってもらうようにします。そこでアドバイスをもらい、さらに質のいい教材を作っていくわけです。コンピュータに自分が作成した教材を保存して、それをほかの教師が引き出せるしくみも整いつつあります。こういった教材研究への取り組みは、生徒の学習環境の向上に直接的に還元できるはずです」（百田先生）

同校では平成2年度に「教育計画」が作成された。そのときに、定期テストは同一科目同一問題で作成すること、そのために授業の進度は常に教科担当者同士で綿密な連絡を取り合うことなどが確認されたが、これを機に「小テストはどのように行うか」「副教材はなにを使うか」など、授業や教材の共有化が進むようになったとのことだ。

## 増えてきた個人面談

そして教師の取り組みは、当然生徒との関係作りにも及んでいる。

「もともと本校は、教師と生徒との関係が親密なんです。休み時間に生徒が職員室に入ってきて、教師と話をしていく光景は日常的に見られます。教師の方も、生徒が質問に来ればいつまでもつき合うし、また質問に来ることを歓迎していますよ」（百田先生）

同校では、面談の機会を数多く設ける教師が増えており、どのクラスも、少なくとも年3～4回は開かれる。

「模試の前に面談をして、生徒といっしょに目標を決める教師もいます。そして模試のあとにもう1度面談。目標をクリアできたかどうか検討するんです。教師が生徒に寄り添って指導することで、生徒は具体的な課題設定や学習計画が立てられるわけですね」

名古屋学院高校における生徒の学習環境の改善は、1人ひとりの教師の真摯（し）な姿勢から実現されているといえるだろう。

ViewSpecial
特集
仕掛ける学習指導

**先生のご意見、お待ちしております！**
生徒を主体的に学習に取り組ませるためには、今まで以上に学習の環境作りが重要になっているようです。編集部では今月の特集について先生方の「これだけはいいたい」というご意見・反論・悩みなどをお待ちしています。巻末葉書、またはEメールで編集部までお寄せください。
アドレス：view21@mail.benesse.co.jp